7．ま と め

4区14号横穴墓の玄室の左奥部に、2ケの人骨が散在していた。

被葬者は1体で、骨の遺残性きわめて不良である。

被葬者は女性、年令は熟年（？）位、身長不詳である。

[15号横穴墓]

玄室内には、数体分の人骨が集骨状に散在していた。遺残骨は完形骨はなく、主に頭骨片と長管骨（下肢骨）であった。

1．骨の遺残性

集骨状の骨の遺残性は、やや不良で、完形骨はない。

2．遺 残 骨

主要骨の個数、左右別と個体数

骨名	個数	右	左	不明	個体数
大腿骨	7	4	2	1（左？）	4
脛　骨	7	3	3	1	3＋α(1)
寛　骨	4	2	1	1	2＋α(1)

3．個 体 数（被葬者数）

大腿骨は7ケ（右4、左2、不明1：左？）遺残していることから、4体が推定される。

脛骨は7ケ（右3、左3、不明1）遺残していることから、3体＋α（1）の4体が推定される。

寛骨は4ケ（右2、左1、不明1）遺残していることから、2体か2体＋α（1）が推定される。

下肢骨から、被葬者数は最大4体の可能性が高い。

さらに、頭骨片6ケを精査すると、その中に、小児頭骨片と乳犬歯の歯冠1ケ検出した。

以上から、被葬者は5体であった。

4．推定性別、年令と身長

下肢骨は、すべて成人骨であるが、細く、繊細で、筋付着部の粗面の発達が弱いことから、4体はすべて女性骨と推定する。

頭骨を精査すると、女性骨と推定されるのが1ケ、遺残頭頂骨の1ケの矢状縫合は完全融合しているので、女性4体のうち、1体は壮年後期～熟年者が含まれているものと推察する。

他の頭骨片の縫合部は、鋭で鋸状を呈しているので、若年者（壮年前期？）が推察できるが、それ以上の年令区分は不詳である。

遺残4肢骨は、すべて破損骨で、完形骨でないので、女性4体の推定身長は、すべて不詳である。

小児骨の性別は不明、年令は10才前後位、身長不詳である。

5．ま と め

4区15号横穴墓の玄室内には、人骨が集骨状に遺残していた。

被葬者数は5体で、内訳は4体は女性骨、他の1体は小児骨であった。

女性骨4体は、すべて成人域で、うち1体は壮年後期～熟年者、他の3体は若年者で壮年前期位が推定された。

女性4体の身長は、いずれも不詳である。

小児１体の性別不明、年令は10才前後位、身長不詳である。

[17号横穴墓]

玄室内には、須恵器が散在、遺残性不良の人骨が若干遺残していた。

骨の遺残状態から、被葬者は２体（♂、♀）が確認されたが、須恵器と耳環、その他の配置からして、さらに１～２体が埋葬された可能性がある。

１号人骨

玄室中央部に、頭骨と下肢骨が遺残していた。しかし、遺残骨は破片化していた。

１．骨の遺残性

遺残性きわめて不良で、遺残骨量も少ない。

２．遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭　骨：顔面骨と後頭骨　破片化

下肢骨

寛　骨：左；寛骨臼窩部とその周辺骨

右；腸骨の１部

大腿骨：左；骨片化、骨長425㎜

右；骨片化、骨長425㎜

脛　骨：左；骨片化

右；骨片化、骨長325㎜

腓　骨：左右不明；骨片化

３．推定性別

骨の遺残性不良と遺残骨量少なく、性別推定するには資料不足であるが、大腿骨と脛骨の大きさと骨長からして、本屍骨は男性骨と推定する。

４．推定年令

遺残骨は、すべて破損、骨片化しているので、年令不詳であるが、遺残骨の大きさから成人域であるが、それ以上の年令区分は不詳である。

５．推定身長

遺残大腿骨長から、身長はピアソン法で161.1㎝、藤井法で159.8㎝である。

６．そ の 他

骨の遺残性不良で、完形骨がないので、骨の異常（骨折・疾患・創傷）は不詳である。

２号人骨

玄室中央部やや奥よりの位置より、遺残骨１ケ検出した。

1．骨の遺残性

遺残性きわめて不良、破片化していた。

2．遺残骨名とその部位

上肢骨

上腕骨：左（？）；骨体　破片化

3．推定性別

遺残上腕骨の形状からして、女性骨と推定する。

4．推定年令

遺残上腕骨が破片化しているので、詳細不詳であるが、一応成人域と推定する。

5．推定身長

遺残上腕骨は完形骨でないので、本屍の身長は不詳である。

6．そ の 他

遺残上腕骨が破片化しているので、骨の異常（骨折・疾患・創傷）の有無は不詳である。

7．ま と め

玄室内には、遺残性きわめて不良の人骨が遺残していた。

玄室中央部の遺残人骨は男性、年令は成人域位、身長はピアソン法で161.1cmである。

玄室中央部やや奥よりの遺残人骨は女性、年令は成人域、身長不詳である。

玄室内の須恵器と耳環らの位置からすると、被葬者は確認された2体（♂、♀）の他に、少なくとも1～2体が埋葬された可能性がある。

考　　察

骨の遺残性は、遺体の安置された土質に大きく左右される。

一般的に、乾燥性（排水）のよい土質や砂地では骨の遺残性がよく、粘土質や酸性土質では極端に骨の遺残性は不良である。

島根県の横田町[3]、仁多町の横穴墓[4)5)]から出土人骨は、一般的に、骨の遺残性はきわめて良好で、末梢骨まで遺残することが多い。

これは、土質が前者に属していることによる。

これに反して、島根県東部[6)7)8)]と鳥取県西部に[9)10)]の土質は、後者に属し、一般的に、骨の遺残性は不良である。

とくに、未熟な骨の遺残性が悪く、かろうじて、歯牙（乳歯）のみ遺残していたのもあった（1区2号横穴、4区15号横穴）。

横穴内に、被葬者1体が確認されたが、玄室内の遺物の配置状況から、勘案すると、被葬者は少なくとも、もう2～3体が埋葬されたと推察されるのもあった（1区1号横穴）。

また、横穴玄室内の須恵器と耳環の配置具合から、確認された出土人骨の他に、さらに1～2体の埋葬が推察できた横穴もあった（4区17号横穴）。

以上から、骨の遺残性不良（とくに未熟骨、消失遺体）と横穴内の遺物の配置状況らを勘案すると、本横穴群の全被葬者数は、確認された33体の他に、さらに多くの被葬者があったことが推察された。

文　　献

1．Pearson, K.(1899): Mathematical contributions to the theory of evolution, V. On the reconstruction of the stature of prehistoric races, Phil. Trans. Roy. Soc. London. ser. A., 192, 169－244.

2．藤井　明（1960）：四肢長骨の長さと身長との関係に就いて。順天大保健体育紀、3,49-61.

3．井上晃孝（1994）：横田町宮ノ峠横穴墓出土人骨について，角・宮ノ峠横穴、柏原遺跡発掘調査報告書，14-25、島根県横田町教育委員会.

4．井上晃孝（1991）：川子原横穴墓の人骨について，島根県埋蔵文化財調査報告書第ＸＶII集，43-47，島根県教育委員会.

5．井上晃孝（1992）：コフケ横穴出土人骨の概要，島根県埋蔵文化財調査報告書第ＸＶIII集，21-26，島根県教育委員会.

6．井上貴央、井上晃孝（1983）：黒鳥２号横穴の人骨について，黒鳥２号横穴発掘調査報告書，14-19，安来市教育委員会.

7．井上晃孝（1984）：高広遺跡横穴墓より出土の人骨について，高広遺跡発掘調査報告書，195-204，島根県教育委員会.

8．井上晃孝（1995）：舟津横穴群出土人骨について，松江市文化財調査報告書第58集，16-19，松江市教育委員会.

9．井上貴央、井上晃孝（1984）：陰田古墳時代人骨について，陰田，74-78，末子市教育委員会.

10．井上晃孝（1990）：マケン堀横穴墓群出土人骨について，西伯町埋蔵文化財調査報告書第１集，95-115，鳥取県西伯町教育委員会.

要　　約

島根県東出雲町の島田池遺跡横穴墓群は33横穴より成り、その内人骨出土した横穴墓は14横穴であった。

本横穴墓群の出土人骨の遺残性は、全般的には不良であったが、中には比較的良好なのもあった。

確認できた総被葬者数は33体で、内訳は男性12体、女性13体、小児３体と性別不明５体であった。

被葬者の年令構成をみると、男性では壮年期10体、熟年期１体と年令不詳の成人域１体であった。

女性では壮年期９体、熟年期２体と年令不詳の成人域２体であった。

小児の年令は、10才前後３体であった。

性別不明者の年令は、年令不詳の成人域３体と若年者（10代）２体であった。

１横穴墓の平均被葬者数は2.4体であった。

出土人骨がない横穴、また横穴の遺物らの配置状況からみて、確認された人骨の他に、人骨が消失した可能性が推察される横穴も若干あったことから、本横穴墓群の総被葬者数は、確認された33体を上回ることが推察された。

付表　島田池遺跡横穴墓群出土人骨一覧

区No.	横穴No.	被葬者数	推定性別				推定年令	推定身長
			男	女	小児	不明		
1	1	1	1				壮年前期	不詳
〃	2	3		1	2		♀:壮年、小児1,2:10才前後	♀:不詳、小児1,2:不詳
〃	3-B	5	2	2		1	♂1:壮年、♂2:熟年、♀1:壮年中期、♀2:壮年前期、不明:若年者(10代)	♂1:163.0cm、♂2:158.3cm、♀1,2:不詳、若年者:不詳
〃	3-C	2	1			1	♂:壮年、不明:若年者(10代)	♂:160.2cm、若年者:不詳
4	5	2	1	1			♂:壮年、♀:壮年	♂:不詳、♀:不詳
〃	6	3	2			1	♂1:壮年、♂2:壮年 不明:成人域	♂1:162.1cm、♂2:165.8cm 不明:不詳
〃	7	2	1	1			♂:壮年、♀:成人域	♂:161.5cm、♀:不詳
〃	8	2				2	不明1,2:成人域	不明1,2:不詳
〃	10	1	1				壮年中期	不詳
〃	11	1	1				壮年	161.0cm
〃	12	3	1	2			1号♂:壮年中期、2号♀:壮年中期、3号♀:壮年前期	1号♂:162.6cm、2号♀:140.3cm、3号♀:142.1cm
〃	14	1		1			熟年(?)	不詳
〃	15	5		4	1		♀3体:壮年前期(?)、♀1体:壮年後期～熟年、小児:10才前後	いずれも不詳
〃	17	2	1	1			♂:成人域、♀:成人域	♂:161.1cm、♀:不詳
	14	33	12	13	3	5		

第２節　東出雲町鷭貫遺跡の層序と古環境

中村唯史（島根大学地球資源環境学教室）

はじめに

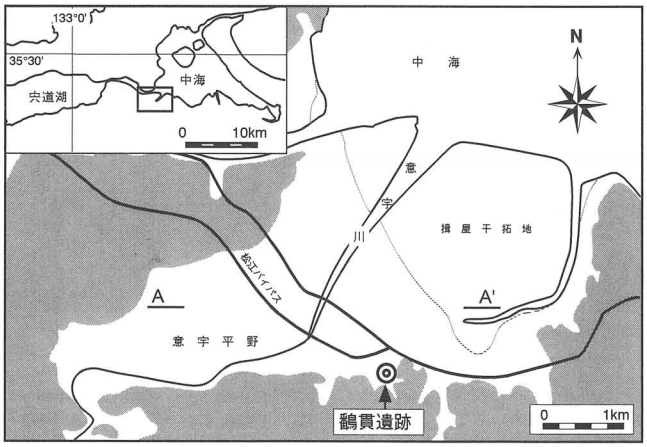
島根県東出雲町の鷭貫遺跡は中海に東面する意宇平野東部に位置する低湿地遺跡である。建設省の安来バイパス建設工事にともなって1993年に発掘調査が行われ、縄文時代後期（4,000～3,000年前）以降の遺物が多数出土した（建設省中国地方建設局、島根県教育委員会、1994）。これらの遺物の多くは河川や湿地の堆積層中に含まれ、遺物包含層の下位には棲管型の生痕を多数持つことから潮間帯の堆積層とみられる完新統の砂層が分布する。この砂層は標高＋1.5mまで連続し、完新世に現在より海面が高くなった時期が存在することを示唆する。堆積時期は少なくとも縄文時代晩期（3,000～2,300年前）以前である。日本列島の各地で縄文時代前期（6,000～5,000年前）頃に海面が現在より高かったことが報告されており（UMITSU、1990；太田ほか、1989など）、山陰地域では豊島（1978）、林（1991）、中村ほか（1996）などが縄文時代前期頃の高海面期を報告している。鷭貫遺跡で発見された砂層はこの地域の完新世の古環境を検討する上で貴重な資料といえる。

鷭貫遺跡周辺の地形と地質

鷭貫遺跡は意宇川の下流に発達する意宇平野に位置する（第１図）。意宇平野は東に向かって開いた小規模な沖積平野で中海に面する。意宇川は平野を西から東へ流れる。平野の西部は意宇川扇状地の緩傾斜地からなる。意宇川扇状地はおもに礫層および砂層からなる（第２図）。東部には中海の岸沿いに形成された砂州が微高地をなす。東出雲町の市街地は砂州上に位置する。扇状地と砂州の間の狭い範囲に平坦な三角州低地が分布する。三角州低地の地下には軟弱な泥層が分布し、貝化石が含まれる。平野の東側には中海を干拓した揖屋干拓地がある。鷭貫遺跡は平野東部の三角州低地上に立地し、東側には第三系の砂岩からなる丘陵がせまる。

調査区内の層序と層相

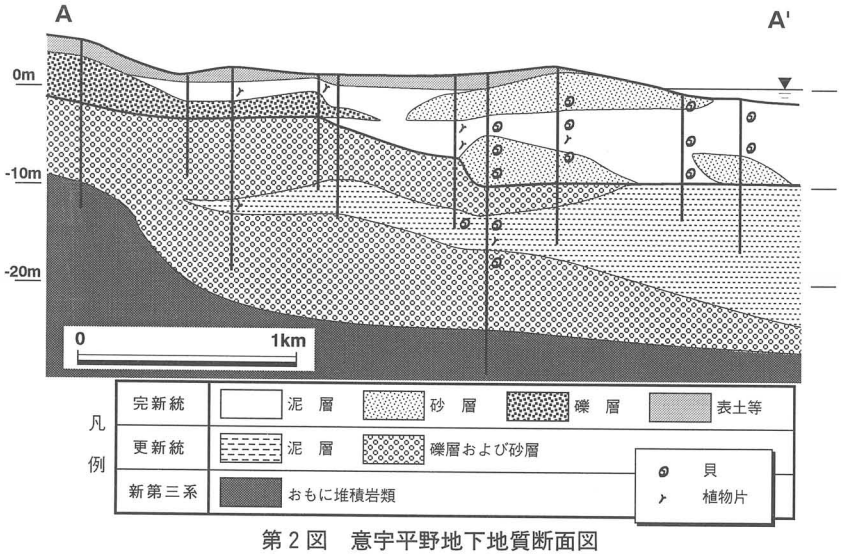
鷭貫遺跡の調査区内では第三系の砂岩が東から西へ傾斜する埋没地形をなし、これに不整合で完新統が重なる。完新統は下位から青灰色砂層、黄褐色砂層、泥炭質泥層、現代の表土（水田耕作土）で、調査区の北西隅では黄褐色砂層の上面から削り込んだ旧河道の一部が認められる。旧河道を埋積する堆積層は砂層を挟んだ砂質泥～泥炭質泥である。（第３図）。遺物は泥炭質泥層と旧河道堆積層に含まれる。次に各層の層相を述べる。



第１図　鷭貫遺跡位置

打点部は丘陵および山地、破線は揖屋干拓地建設以前の汀線位置、Ａ～Ａ'は第２図の地質断面図測線

青灰色砂層：第三系の砂岩に不整合で重なる。基底部には下位の砂岩層に由来する礫を多く含む。青灰色砂層の下部は粗～中粒砂を主体とし、上部は粗粒砂を主体とする（第４図）。側方へは比較的連続性がよく、調査区内では層相はあまり変化しない。全体に生物によるとみられるじょう乱を受け、堆積構造は不明瞭である。この砂層の標高－0.5～＋0.5mの範囲には棲管型の生痕が多数含まれる。生痕は直径1.5～２㎝、長さ15～30㎝のものが多い。形態は緩やかに屈曲し、太さの変化がない管状で、分岐するものも認められる（第５図）。この形態は潮間帯に生息するヒメスナホリムシやヒメシオマネキの棲管の形態と類似する。貝化石は含まれない。

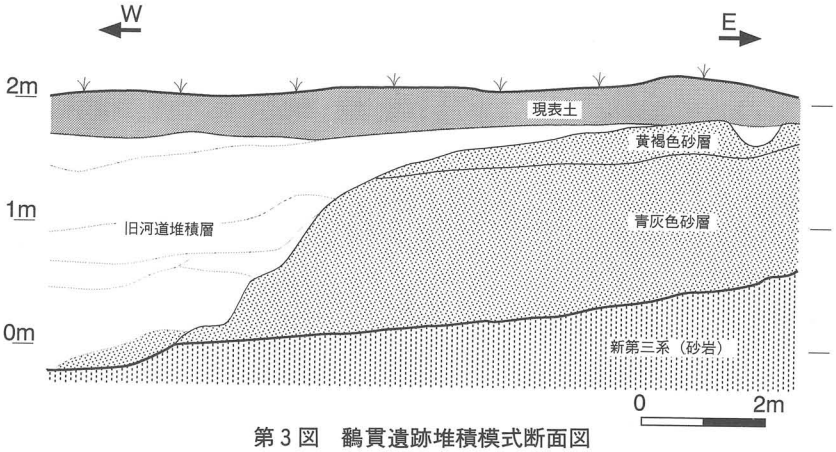


第２図　意宇平野地下地質断面図
建設省計画局ほか（1967編）をもとに作成。測線位置は第１図参照

黄褐色砂層：下位の青灰色砂層に一部指交して重なる。調査区の中～北部になだらかな高まりを作って分布し、南部では薄くなり、南端部では分布しない。細礫～粗粒砂からなり、層理面がN40°～70°W、５～20°Wを示す平板状斜交層理がみられる。下底側に粗粒物が多く集まる。しばしば泥炭質泥の薄層が挟まれる。この砂層に対して掘込まれた弥生時代（2,300～1,700年前）の遺構が検出されており、また、後述のように砂層を削り込んだ旧河道堆積層の下部の堆積時期が縄文時代晩期とみられることから、砂層の堆積時期はそれ以前といえる。

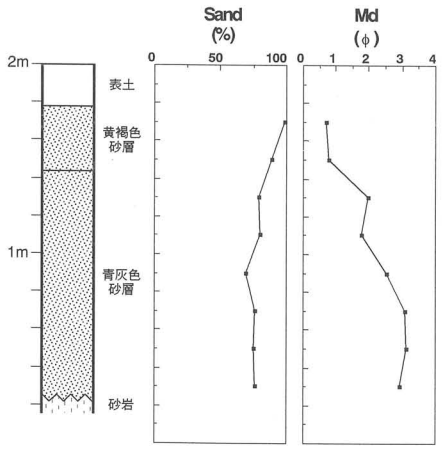
泥炭質泥層：下位の黄褐色泥層が構成する地形面の凹地を埋める形で調査区の南部に分布する。層相から上部と下部に区分でき、下部は未分解の植物片が多量に含まれ、上部は下部と同様に有機質であるが、植物片は下部に比べ少ない。泥炭質泥層は遺物包含層で、下部には弥生時代中期の遺物が含まれ、上部には弥生時代から近世までの遺物が混在する。下部は時期が異なる遺物が含まれないことから堆積時期は弥生時代中期とみられる。上部は近世以降に攪乱を受けたとみられる。

旧河道堆積層：調査区の北西隅で旧河道の東側の傾斜が認められた。旧河道を埋積する堆積層は最下部に細礫～粗粒砂からなる砂層があり、それより上位はしばしば砂層を挟む砂質泥～泥炭質泥である。下～中部は砂質泥、上部は植物片を多量に含んだ泥炭質泥を主体とする。旧河道堆積層は遺物包含層で、下部は縄文時代後・晩期、中部は弥生



第３図　鷂貫遺跡堆積模式断面図

時代前期、上部は弥生時代中期と遺物の時期に差が認められ、そこに含まれる遺物の時期がその層準の堆積時期を示すとみられる。



第４図　鷭貫遺跡堆積層の含砂率および砂の平均粒径
平均粒径はφスケールで表示している。値が小さいほど粗粒である。

各層の堆積環境

遺跡堆積層の層相から堆積環境を考察する。

青灰色砂層は潮間帯に生息する甲殻類の棲管に類似する生痕が多数含まれる。砂層の下部には海～汽水の沿岸域に生息する珪藻のGrammatophora oceanicaが含まれる。珪藻殻の量は少なく、大部分は破片であるために詳細は不明であるが、上記の種が優先的に出現する。これらのことから青灰色砂層は中海の潮間帯の堆積層と考えられる。この砂層の上面は標高＋1.5mで、全体として上方へ粗粒化するが、基本的に一連の堆積層である。第４図に示した含砂率および平均粒径は標高＋１m付近で変化が認められ、ここを境に堆積環境が若干異なると考えられるが、少なくともこれより下（標高＋１m以深）の層準は一連の堆積物である。

黄褐色砂層は平板状斜交層理が発達し、泥炭質泥の薄層が挟まれる層相から、氾濫した河川の洪水流によって細礫～粗粒砂が堆積し、流出水量低下期に流れが停滞したときに浮遊していた泥粒子や植物片が沈下して堆積することが繰り返されて形成されたと考えられる。

泥炭質泥層は黄褐色泥層が構成する高まりの後背の凹地に供給された泥粒子や植物片が堆積して形成された湿地の堆積層と考えられる。泥粒子などを供給した水流には土器などの比重の大きいものを運搬する力はなかったと考えられ、それらは人為的に投棄された可能性が高い。

旧河道はその一部しか検出されていないためにその規模などが不明である。旧河道堆積層の最下部にみられる砂層は河道の削り込みを形成しうる力をもった水流によって堆積したと考えられる。それより上位では細粒物を主体とし、薄い砂層を挟むことから、定常では水流は弱く、洪水時にのみ砂が供給されたと考えられる。特に上部の植物片を多量に含んだ層準の堆積時には定常では流れのない湿地の状態だったと考えられる。

海面変化との関係

鷭貫遺跡の堆積層の形成は海面変化に強く規制されていると考えられる。青灰色砂層は上述のように潮間帯の堆積層と考えられる。砂層中で潮間帯の上限を認定することは困難であるが、少なくとも標高＋1.0mまでは潮間帯と考えられる。現在の中海では平均海面は標高＋0.3mで、海面が高くなる夏期は標高＋0.6mに達し、冬期は０mに低下する。日潮差は小さく、最大で0.2mである。季節的な変動まで含めると現在の潮間帯はおよそ標高０～＋0.6mの範囲となる。青灰色砂層堆積時の中海の潮位差が現在と変わらないならば、青灰色砂層の分布する高さが現在の潮間帯より高いことから当時の海面は現在より高かったと考えられる。砂層中の標高＋1.0mを潮間帯の上限とみなすと、海面は現在より0.4m高かったことになる。また、上位の黄褐色砂層は陸上に堆積した河川の洪水堆積物と考えられ、青灰色砂層と一部で指交することから時間的に連続した地層と考えられる。したがって、青灰色砂層から黄褐色砂層が堆積した時の海面は黄褐色砂層の下限の高さ（標高＋1.4m）よりは低

かったと考えられる。その時期は縄文時代晩期以前であり、青灰色砂層の堆積と日本列島の各地で報告されている縄文時代前期頃の高海面期との関連が推定される。

旧河道は、青灰色砂層、黄褐色砂層の堆積時より海面が低下した時期に形成されたと考えられる。旧河道は一部しか検出されていないため、その形成開始時期や海面の低下量については判らないが、少なくとも旧河道堆積層の最下部の堆積時期（縄文時代晩期）には、青灰色砂層の堆積時より海面が低下していたと考えられる。

意宇平野の古地理変遷

6,000年前（縄文時代前期）：縄文時代前期は縄文海進で海域が最も拡大した時期である。意宇平野の三角州低地の地下に分布する貝化石を含んだ軟弱な泥層は縄文海進で拡大した中海の海底に堆積した地層と考えられる。鷭貫遺跡の青灰色砂層はその汀線付近に堆積した。

3,000年前（縄文時代晩期）：縄文時代前期に比べ海面が低くなった。平野東部の砂州列はこの時にはすでに形成されていた。海面の低下に伴い鷭貫遺跡では河道が形成された。

2,000年前（弥生時代）：中海や宍道湖周辺の沖積平野では弥生時代になると平野上の土地利用が急速に拡大する。鷭貫遺跡でもこの時期の遺構が検出されている。

文献

林　正久、1991：松江周辺の沖積平野の地形発達。地理科学、46、55-74。

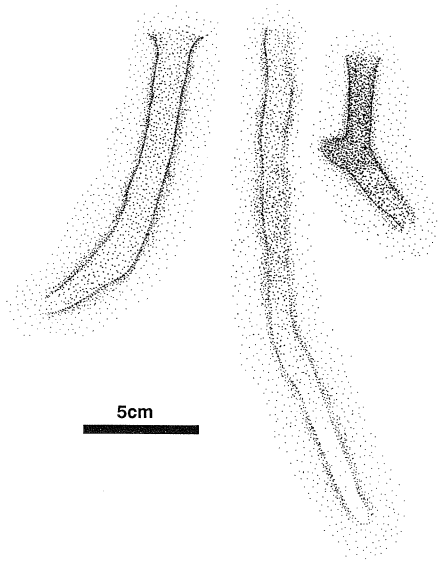
建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会、1994：中山遺跡・巻林遺跡一般国道９号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区II。ｐ96。

中村唯史・徳岡隆夫・大西郁夫・三瓶良和・高安克己・竹広文明・会下和宏・西尾克己・渡辺正巳、1996：島根県東部の完新世環境変遷と低湿地遺跡。LAGUNA 汽水域研究、３、9-11。

太田陽子・海津正倫・松島義章、1990：日本における完新世相対的海面変化とそれに関する問題－1980～1988における研究の展望－。第四紀研究、29、31-48。

豊島吉則、1978：山陰海岸における完新世海面変化。地理学評論、51、147-157。

UMITSU Masatomo、1991： Holocene Sea-Level Changes and Coastal Evolution in Japan. The Quaternary Research、30、187-196。



第５図　青灰色砂層中の生痕スケッチ

島田池遺跡・鵜貫遺跡

一般国道９号安来道路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書　西地区Ⅷ
本文編（第２分冊）

1997年３月　発行

発行　建設省松江国道工事事務所
　　島 根 県 教 育 委 員 会
編集　島根県埋蔵文化財調査センター
　　（〒690-01　島根県松江市打出町33　TEL 0852-36-8608）
印刷　㈱ 島 根 県 農 協 印 刷